ある日の時計塔

一さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある日の時計塔

【Ｎコード】
Ｎ７２３５Ｅ

【作者名】
一さん

【あらすじ】
ある日、ナギが学校を休んだ。一人で帰るハヤテに生徒会会長が出会う。さてさて、一体何が起きよか？それは読んでからのお楽しみ

前編

今は午後八時半。
辺りは暗く、闇を映している。様々なモノが黒に塗られ、個々を強調する色が薄れている。
だが、そんな中、灯台のようにポツンと光を放つ場所が一つある。
それは、ここ白皇学院でお空に最も近く、また、地上から最も隔離されている所。
生徒会室だ。
下校時間はもうとっくに過ぎており、生徒は帰宅しているはずだ。
なのに、この生徒会室には人が残っている。
一人は水色の髪をした執事服の少年。
一人は桃色の髪を背中まで伸ばした、この部屋の主である少女。
一つの部屋に男女が二人っきりのこの状況、当人達は

（どうしよう）

（どうしましょう）

と悩み、

（何だかこれは）

（何だかこの空気は）

と感じて、

（（き、気まずい））

と。戸惑っていた。
何故こんなことになっているのか、それは数時間前に遡る。

午後五時半頃。
学校が終わり、学生が部活に勤しんでいる頃、一人の少年がこの大通りを歩いていた。
陽が沈む中、オレンジ色の光が周りの景色に色づげを行い、木も草も空もその色彩と共に鮮やかな輝きを放っていた。夜になると瞬く間にその光は色を失う。だからこそ、昼と夜の隙間にある今が生命が最も美しなり、最も“生きている”時間だ。
それなのにこの道を行く少年は肩をぐったりと下ろし、うつむきがちに歩を進めていた。
理由はいつも横にいる、あの金髪のツインテールの少女がいないからだろう。

「ハァ〜、お嬢様いないと学校もハリがないなぁ」

綾崎ハヤテは呟いた。
今日、彼の主である三千院ナギは学校に来ていない。理由は、まあ、例によってのまた同じみの引きこもりだ。
朝、起こしに来たハヤテにナギは
「今日は学校を休む！」と言ったのだ。何故か理由を問いても教えてくれず、助けを求めたマリアにも苦笑いしながら、
「今日は先に行って下さい」と促された。
どうやら、マリア了承の上での不登校のようだ。

（ふう〜、まったく…どうしたんでしょうか？本当に。）

主の行動に頭を悩ませつつも、その原因が判らない自分にふがいなさを感じた。

執事としてもっとしっかりしなければいけないとは思ってはいるが、中々上手くいかない。只でさえ、最近『甘やかしている』と傍にいるメイドさんにも言われるのだ、本人に自覚がないにしろ、周りから見ればそう見えるのだろう。

ハァ～、と一つ溜め息が出てしまう。

人を良い方向に導くのは、やはり簡単なことではない、とハヤテは思った。

時間を見ると、今は五時半過ぎ。

握った携帯の画面に写し出した時計はこく一刻とその針を進める。

はて、屋敷に戻ったら今日は何を作ろうか。確か、タイがあったから煮付けにしたら美味しいだろう。いや、和食だけでなく洋食でもいい。今日はタイをメインにしよう。そして、デザートは少し酸味の効いた、甘いレモンタルトだ。きっと喜んでくれるに違いない。

みんなの笑顔を想像しながら、今日の夕食に頭を巡らせていたハヤテを、携帯のバイブ機能が現実に戻した。

見ると受信メールが一通、マリアからだった。

そこにはこう書かれていた。

『ハヤテくん、帰宅中すみませんが、一二時間ほどどこかで時間を潰して来て下さい。

こちらは少しかかりそうなので。』

一体、何故遅く帰らなければいけないのか、ハヤテには分からなかった。だけど、そのことには敢えて触れずに、

『わかりました。』

とだけメールを打った。何だか、その方が良いと思ったからだ。

送信ボタンを押してメールを返したハヤテ、さてこれからどうしようかともの思いに考えていると、後ろからゆっくりと近づく者が

いた。
　気付かれないように気配を消して、ハヤテの背後まで来たその人物は、ハヤテが気付く前に行動を起こした。

　いきなり視界が暗くなった。僕は
「うわっ」と、情けない声を上げてしまった。そしたら、

「だ～れだっ」

と、こんな言葉が後ろから掛けられた。まさしくこれは定番のアレである。
　この声には覚えがあった。聞いた瞬間に僕は時計台の一番上にいるアノ人を思い浮かべ、ふとっ笑みをこぼれる。

「ハハ、ヒナギクさんですね」

「はい。正解」

　手を目から離し、ヒナギクさんは僕の前に出た。

「やっぱり、分かっちゃった？」

「まあ、そりゃあ分かりますよ。ヒナギクさんですから」

「へっ」

　僕がそう言ったら、ヒナギクさんは目を丸くし、意味のない言葉を発した。
　そして、顔を背け、

「ふ～ん」とだけ返した。何だか、顔が赤いような気がするが気のせいかな？
それを見て僕は、さっきも思ったことを今度は口に出してみることにした。

「ヒナギクさんって意外と子供っぽいんですね」

これにヒナギクさんは敏感に食い付いて来た。

「ぽくなんかないわよ！てか、何でそうなるのよ！」

「いや、
「だ～れだっ」なんて、今どきそんな子供っぽい行動する人いないですし」

「うっ」

と言葉を詰まらせたヒナギクさんはまた顔を背け、小声で言う。

「いいじゃない、別に」

この時、どこか拗ねたようなヒナギクさんが、どことなくお嬢さまに似ていて、何だか少し可愛いと思った。

「ところでどうしたの？こんなところで。」

ヒナギクさんが質問してきた。僕はあらかたの事を説明した。ヒナギクさんは頷きながら僕の話を聞いてくれた。

「へぇ～、一二時間ほどかぁ」

「はい。一二時間ほどです。」

何故お嬢様が休んだのかを聞かないのは、多分ヒナギクさんもいつものこと（新作ゲームか休み願望）と思っているからだろう。

そうかもしれない、と僕自身も思ってしまうから、それは仕方がないことだろう。

「ところで、ヒナギクさんはこんな所で何をしているんですか？」

「私？、私は気晴らしかな。生徒会の書類の処理が多くって。」

この言葉で原因は大体わかってしまう。多分、生徒会メンバーの三人組のせいだろう。仕事をサボるザ・生徒会の人達はヒナギクさんをよく悩ませているから。

「ハハハ、ヒナギクさんも大変ですね」

「ええまったく。ほんとよ。」

「手伝いましょうか？」

「へっ」

僕の提案にヒナギクさんは言葉にならない言葉を出した。唐突なことで、少し驚いたようだったので僕はもう一度言った。

若干の沈黙。

のあとに、ヒナギクさんが言った。

「いいの…？」

少しうつむきがちな視線で発したそれは、どこか恥ずかしそうな、控え目な声だった。

「はい。手伝わせて下さい」

「…ありがと」

呟いたような声でヒナギクさんはお礼を言って振り返った。
夕日の色に染められて、ヒナギクさんの顔が赤くなっていたように僕には見えた。

ココは時計塔の一室。
暖かい空気がこの場を包み、沈黙が流れる。時計の一定の音が聴こえるだけで、中にいる二人は機械的に己の仕事をこなしている。
ふいに、ハヤテが動いた。この場の沈黙を破りヒナギクに尋ねる。

「あっ、紅茶いります？」

遠慮がちに聞いたハヤテにヒナギクは顔を上げ、
「えぇ」とだけ返し、また下を向いて仕事に取り掛かった。
ハヤテは一つ笑みを浮かべ、
「はい！」と気持ちいい返事をして、紅茶を入れに行った。
動くのを確認するとヒナギクはぼぉうとハヤテを眺めた。
どうして自分は彼を好きになったのだろう。カッコイイとこもあるが、顔は美形とは言えず、正直、タイプでもなかった。　でも、自分は彼に惹かれた。それは何故だろう。

境遇が似てたから？
　ふと、ヒナギクは考えた。だがすぐに首を振った。
ううん、それは違う。確かに、似てるかもしれないが、自分達が置かれた時の心の状態は明らかに違うのだ。
　ハヤテの場合、ずっと自力で生きてきた。と言っても、周りに幾らの助力があったであろう。だが、何よりハヤテには最も貰うべき家族の支えがなかった。幼少期から親のために働いたのにも関わらず、まともな愛情を知らなかったハヤテには、もう分かっていたのだ。自分が捨てられるかもしれないということを。
　ここが自分との決定的な差だ、とヒナギクは思う。
　ヒナギクの場合、それまでは普通に“家族”であった。そこには愛情があり優しさもあり温もりもあった。ハヤテにないモノをヒナギクは持っていたのだ。　だが、その関係も終わった。借金を押し付けられる形で彼女は親に捨てられたのだ。
幸せからの絶望。信じていた者からの裏切り。それは、十代も満たない幼い少女とって、余りに辛い現実だった。
だからこそ、興味があった。自分と同じ裏切りを受けて同じ状態になったハヤテに。違うのは、その時の心。どちらの方が辛いか、比べられるものではないけれど、ついつい秤にかけてしまう自分がいる。

「ふぅ〜〜」

　ヒナギクは盛大に溜め息をついた。考えるのに疲れたため、今は余計な視界を遮断する。
　もうよそう、好きになったのは仕方がない。理由を並べても、そんなに何が意味があるだろう。せっかく二人きりなのに。
今は彼との時間を楽しもうっと思うヒナギク。だか、ここがで今一番大切なことに彼女気付いた。

（……二人きり）

そう、二人きり。思春期の男女二人が一つの部屋を共有するこの状況。

ましては相手は自分の意中の人である、意識するなとは無理な話だ。さっきまでは集中していて気にもとめなかったが、理解したのだ。だから、できるはずもない。

そのことに気付いたヒナギクは、急いで目を開けた。すると、

「わっ」

目の前にはハヤテの顔。そのかちあう視線にヒナギクは身体を跳ねらせ、急いで後ろに引いた。そこには驚きの顔が見受けられた。

その行動に疑問を持ったハヤテが尋ねる。

「どうしたんですか？」

どうしたんですか、そんなのは決まっている。目を開けたら、すぐ前にハヤテがいたのだ、驚くことも無理はないだろう。

それなのにこの男は己のせいとはみじんも思わず、なんて無邪気な笑顔を自分に向けるのだろう。

ヒナギクはお返しとばかりにジト目でハヤテを見る。

「えっ、あのっ、…どうかしましたか？」

困惑の表情をするハヤテは、自分が一体何をしたのかわからない。だから、恐る恐る聞いた。

「別に」

返ってきたのはこんな一言。これでは尚更わからなくなる。それどころか、余計に不安が積もる一方。

だが、これは別に怒っているわけではない。ちょっとした悪戯だ。

自分を散々惑わすハヤテを、今度は自分が彼を惑わす。

ヒナギクは思った。

—こうなればとことん彼を困らせてやる、と。

「あの～ヒナギクさん」

「なに？」

「あっ、いえ、僕なんかしたかな～と思いまして」

「別に」

「…」と言葉が出ないハヤテ。ヒナギクの対応に何がなんだかわからず、困惑、いや、焦っている。

—早く機嫌を直さなければ、と。

一方ヒナギクは、表面では冷たくしているが、心内では今の状況を楽しみクスクスと笑っている。

「え～と…」

（ふふふ）

今、この状況が楽しい。今、この状況を楽しみたい。

もっと困らせ、もっと見てみたい。彼のその顔を、もっと—

そんな欲求に駆られたヒナギクは、次は顔を反らすという行動で表した。それもさぞ不機嫌そうに。

「っ」

それは、狼狽するハヤテに更なる追い討ちを掛けた。
女性が根本的に苦手なハヤテは、こういう場合これに対処する術を知らない。だから、とりあえずは、

「ど、どうぞ」

紅茶を出すことにした。
ちらりと、横目でハヤテを見た。
一つ汗をかきながら、こちらの対応をビクビクと伺っている。
子犬のようなその仕草にヒナギクはクスッと笑みを漏らす。

「ふふふ、ありがとうハヤテ君。頂くわ」

流石に少し可哀想になったのか、お礼と共に笑顔を向けた。
それに毒気を抜かれたハヤテは、口を開け、ポカ～ンと言った表情をしている。
―からかわれた
その事実に気付くのに数秒の時間を要いた。
ヒナギクは、ハニワ状態だったハヤテが余程面白かったのか、また笑みを溢した。
作戦は大成功！！とばかりに自分に向けるその顔が、何だが本当に子供っぽくて、ハヤテも、とても怒るきにはなれなかった。
同じ笑顔を向け、笑いあった。
そんな二人の笑い声がこの室内全体に広まった。

後編

◆◆◆

再び、静寂な時間が流れ出した。
スムーズに手を動かし、黙々と仕事を処理している二人。
積まれていた書類はみるみる内にその数を減らし、今では初めの4分の1もない。
無駄のない、とてもスムーズな動きをするヒナギクは、慣れたもので、熟練された動きそのものだった。また、それに劣らないハヤテも流石と言えよう。
残りもあとわずかというところで、ふとっ、ヒナギクはこんな提案をした。

「ラジオでも付ける？」

「はい。いいですよ。」

先のために言っておく。あれは、別に故意ではない。彼女は、ただこの空間に音楽を入れたかっただけなのだ。だから、これから起こることは自業自得とはいえず、彼女のせいでもない。それに、ハヤテだって了承したのだ。
だから、それは誰のせいでもなく、ただ単に“運が悪かった”のだ。
いや、違う。
きっとこれも神様の悪戯なのかもしれない。

ガチャ！

いかにも機械的な作動音の後、ラジオ特有の電波音が続いた。

アンテナをイジリ、チャンネルを変えて人の声を探す。

ジィーーーーー、ジジ

『♪～♪～♪～♪』

始まった。

流れ出した歌は、今流行りの癒し系音楽だった。静かだったこの場所に、ヒーリングが広まる。先ほどから急ピッチな仕事ではりつめていた空気が変わった。

それは、とても穏やかなもので。どことなく、二人の顔にも余裕が出てきた。

しばらく歌が流れた後、その番組は次のコーナーを始めた。題して、

『高校生のお悩み相談室～』

『パチパチパチパチ』

そんな愉快な声で始まった企画は、高校生の日頃思っている不安や悩み、またはストレスを聞いて貰おうと言うコーナーだった。

『はい。ではでは、まず最初は、ペンネーム《ガンオタ》さんから。え～と、

【僕はプラモが好きで、プラモばっかり作っているんですが、そのせいか女子にモテません。一体僕はどうしたらいいでしょうか？】と。答えが判らってる疑問に答えを返すだけ無駄なので、軽くスル～。

では、次には…』『ペンネーム《マカナ》さんからです。

【私には好きな人がいます。一目惚れでしかも、私の初恋になります。私は彼のことが好きで、中々頭から離れません。勉強する時も、お風呂に入っている時も、です。
だから、私は彼に告白しようと思います。
でも、多分彼は私のことは知らないと思います。
彼に私のことを知って貰ってから、告白する効率の良い方法ってありますか？教えて下さい。】
ということです。いや～、お熱いですね～。う～ん、だったら恋文なんてどうですかぁ。今どき、古いけど、きっと効果があると私は思うよ！
まあ、何にしても、これは当人の問題だから、私から言えることは「頑張って」だね～。頑張って～～』

そのような感じで、番組は進められた。

最初は、チャンネルを変えようとしたハヤテだったが、自分と同じ高校生が一体どんな悩みごとをしているのか、興味が出てきたのだ。ヒナギクもまた然りだった。
二人はラジオに耳を傾けながら、残りの作業を行っていった。
やがて、それが終わろうとしていた頃、ラジオもまた終わりを迎えようとしていた。

『はいは～い。今週の手紙はここまでで～す。また来週もじゃんじゃん読みますんで、ドン！ドン！ッ、応募しちゃって下さい。ではでは、今日の〆に、今まで出番がなかった坂本さーん！お願いしまーす。』

『はいはい、坂本です。今夜は一段と寒くなるもようです。なので、風を引かないように、部屋を温めて下さいね。

それでも、まだ寒いというなれば！！！！
｜
｜
｜
｜
｜
｜
｜
一つの部屋で。
男と女。
二人っきりで。
…

ベットの中、お互いの吐息が触れ合うその距離で、二人の男女はみつめあう。

そして、そっと唇が重なった。

それは唇が触れただけの軽いもの。

離れた男の顔は朱に染まり、照れたように顔を反らした。

だけど女はそれを許さず、両手を使って相手の顔を自分に向けた。

また、お互いの瞳が交わる。

ここで男も気づいた。

女も恥ずかしいのだ、ということを。

女は頬を朱に染めながら、紅くなった顔を隠すように、抱きついて胸板に顔を埋めた。

女の甘い香りが男の鼻ををくすぶる。

男は、めまいのような感覚を覚えた。

思考が歪み、理性が崩壊していく。卵の殻が割れるようにだんだんと動物としての本性が顔を出す。

それに追い討ちをかけるべく、女は両腕に力を込めた。

顔を上げた女の目には、小さな雫が溜まっていた。

女は正面に相手を捕らえ、今度は、さっきとは違う、深い口付けをして男を誘った。

そして—

ブチッ

ラジオは喋るの止めた。

電源が切られた。

誰に？

ハヤテに。

⋮ ⋮ ⋮

……

……

……

気まづい静寂がこの場所を支配した。

お互いがそのままの状態で固まっていた。ハヤテはスイッチを切ったままに。ヒナギクは書類に目を通していたままに。

ここで冒頭に至る。

先に動いたのはハヤテだった。

「あっ、紅茶飲みます？紅茶！僕入れますよ。」

「そうね～、じゃあいただこうかしら。ハヤテ君お願い。」

棒読みで慌ててヒナギクはかえした。

急いで席を外すハヤテに、ヒナギクもまた彼と目を合わせようとはしなかった。

再び訪れた気まづさ。

―もう、何なのよ一体。

ヒナギクは心の中でグチった。

一体自分は何かしたか。何も悪いことはしていない。じゃあ、なんで、いっつもこんな悪いことが起きるの。理不尽じゃない。

いっつも、いっつも。

だけど考える。

さっきのことを。

そう、さっきの……さっきの…アレだ。

確かに、今はラジオの通りだ。

男女一組。

一つの部屋で。

二人っきり。

でも、自分とハヤテはそんな関係ではない。
そもそも、付き合ってすらない。あんなのは付き合ってからするものだ。
でも、想像してみる。
自分と彼が……あ、あ、あ、あんなことを、

バッと、ここでヒナギクはうつ伏せになった。顔を隠すためだ。
何を考えている桂ヒナギク。自分は生徒会長だ。常に生徒の見本じゃなければならない存在だ。そんな自分があんな、あんな、不埒なことを。許されるわけがない。

でも、相手が彼なら別に嫌じゃない。いや寧ろ、彼がいい。

そんな感情が沸々と胸の内から湧き上がる。

すると、身体がだんだんと熱くなっていった。それはまるで心と体が、何かを求めているかのようで。モヤモヤとした感情が全体を侵食していった。

だからだろう、ハヤテがヒナギクを呼びかけた時、見上げたその顔に、迂濶にもドキッとしてしまったのは。

風呂上がりのような上気した顔、目元には雫のようなものが溜まっていて、トロンとしたように自分を見つめてくるヒナギクを、色っぽいと思ってしまった。

「あっ、…こ、紅茶！ここに置いときますね。」

「えっ、あ…うん。ありがと。」

目を反らしながらハヤテは告げた。慌てた様子でカップをヒナギクの手元に置く。

ヒナギクの様子が違うことをハヤテは感じとっていた。
だから、いろいろと話題を振った。最近の流行やテレビで話題になった話。または、学校のことや家でのことも。
だけど、ヒナギクは全て
「そうわね」や
「ほんとね」など、正に心ここに在らずといった感じで、てきとうな相槌をうつだけであった。

心の壁が狭ばり、窮屈な思いに耐えながら、ハヤテは必死に考えた。

何をか。

勿論、この打開策だ。

考えて考えて考えて、出した答えが

解読不能

くそ〜〜〜

心の中で涙ながらに嘆いた。

自分が不幸体質だということを瞬く間に実感した。

そう、何もこんな状況のときによりにもよってあんな話をしないでもいいのに。

答えが…見つからない。

だから、とりあえずハヤテは話を振る行為を継続した。

ヒナギクが話しかけてきたのは、ハヤテがナギの話を終えた時だった。

「ねぇ、ハヤテくん」

小さくつぶやかれたその声は、シロップのように周りに溶けこんだ。

やっとのヒナギクからの言葉に、しかし、安心できるものではなかった。なぜなら、明らかにその声色がさっきと異なっていたからだ。

だから、ハヤテの返事は遅れ、少しの間をもって

「はい」と答えた。

「ハヤテ君は、さっきのどう思う？」

すると突然、ハヤテの中で何かが爆発した。爆音が唸りを上げ、爆風が周りのものを破壊していく。

緊急対処システスが作動した。

―危険だ。これは危険だ。
アラーム音がそう告げる。
「えっと、何が…です、か？」
はぐらかす。でも、
「さっきの…アレよ」
そうはさせない。
尚もこちらに目をむけるヒナギクに、ハヤテは躊躇いを覚えた。
再びの、沈黙
だけど、目はハヤテを離さない。
そして、今度もまた、沈黙を破ったのはハヤテの方だった。
「紅茶を飲みましょっ。紅茶。美味しいですよ。」
左手で紅茶を持ち、カップに口を付ける。
ヒナギクはうつ向き、顔が桃色の髪に隠れた。表情が見えない。
「ねぇ」
小さな声が周りに溶けた。だけど、それには明瞭な意思が感じとれる。

ハヤテは紅茶を飲みながら、ヒナギクの次の言葉を待った。

「…襲う？」

ブふッ

「あつっあつっ、あつっ」

思いがけない言葉に、吹き出してしまい、カップを落とした。足に紅茶がかかった。

いきなりのことに、ヒナギクもハっと気づく。

「ちょっ、大丈夫。」

「あ、はい。大丈夫です。大丈夫ですから」

急いで布こうと、台にあるタオルに手を伸ばした。

そして、そこで

二人の手が

共に

触れあった。

視線と視線が交わる。
相手の瞳に見えるのは、相手を見ている自分の顔で。
二人っきりのこの場所で、ハヤテとヒナギクは見つめあった。

今日何度目かになる、静かな静かな静寂がまたこの場所で流れた。

◆◆◆

夜空の元、ハヤテとヒナギクは帰っている途中だった。
真っ暗な空に浮かぶ星達が、夜になってやっと自分の存在を示せるのが嬉しいのか、キラキラと自己主張をする。
その中心には、満月がある。正に威風堂々と、天からこちらを見下ろしていた。

結局、あの後は別段特別なことは何もなかった。急いで手を離し、お互いが一歩引いて残りの仕事にとり掛かった。その間、二人とも顔を合わせようとはせず、仕事が終わるまで沈黙が続いた。

それからは、今に至る。

一歩、一歩地面を踏みしめる。彼と自分は歩幅が違うはずなのに、

それでも歩く速さは変わらない。彼が合わせてくれているからだ。
そんな優しさが、嬉しい。

ヒナギクはそう思った。

そして考える。さっきのことを。

突然、湧き上がったあの感情。自分が自分ではないような。
身体中が熱を帯び、自分の欲求が表に出たような感じだ。
嫌ではなかった。それどころか、もっと感じたいさえ思った。
だから、あの時途中でそれを失ったことが残念だった。

―でも…

ヒナギクは横にいるハヤテを見た。

それに気づいたハヤテが、彼女に問いかける。

「なんですか？」

―ふふふ

「な～んでも♪」

彼女は笑顔で返した。彼もつられて一緒に笑う。

でも…大丈夫。

何たって、彼が隣にいる限り自分はずっとあの思いをすることになるんだから。

ふいに、ヒナギクは空を見上げた。

そこには様々な光が輝き、この雄大な宇宙（そら）に広がっていた。その中で一極目立つ、まあるい満月。月光を放ち、地上に光を照らしだす。

ヒナギクは、そんなセカイに心を奪われながらも、一言小さく呟いた。

「綺麗」と

満月の夜、二人の男女が帰路につく。

触れそうで触れない距離にいる二人の間には、だけどしっかり、
月灯りに照らされた自らの影が共に重なっていた。
自らの分身は寄り添う形で身体を預け、まるで、
それは、恋人達のようであった。
end

番外編『想い人に料理を』（前書き）

その頃のナギは……

番外編『想い人に料理を』

◆◆◆

「痛〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜い」

三千院家の調理場で、少女の叫びがこだました。

「あらあら、大丈夫ですか？ナギ」

先ほどから、その様子を見守っていたマリアがナギに尋ねた。
泣きそうな目でこちらを睨んでくるは指を抑えている。

「大丈夫じゃない。痛いのだ。」

「じゃあ、止めますか？」

「んっ、止めないっ！！！」

ナギは指にばんそうこを貼られながら、その申し出を強く断った。やれやれっ、と思うメイドさんは苦笑しながらも、だけど微笑ましく自身の主を見つめる。

―まったく、この子は

マリアは思う。

この少女は、いつもいつも突然だ。

釣りマンガを読めば釣りに行ったりと、何でもすぐに影響を受ける。それで、周りを振り回す。正直、あまり良いとは言えないけれども、この子はこの子で一生懸命なのだ。今日もまたそうだ。マンガの影響を受けて、学校を休んでまで料理の練習をしている。本当ならば休ませてはいけないのだけれども、理由を聞いたら喉からその言葉が出て来なかった。そう、だって…

「あっちぃっ！」

「ほらほら、大丈夫ですか。」

予め用意していた氷袋を指に当てた。ナギは、何かを訴えかけるようにマリアを見た。

「何ですか。もう止めますか？」

「そんなことはない。絶対にハヤテに、美味しい料理を作ってみせるから。マリアは手出しは無用だぞ。」

…これだから。

だから今日は休むのを許可し、ハヤテを先に学校へ行かせた。

マリアは

「はいはい。」とだけ返し、後ろから、親鳥が我が子が飛ぶのを見守るようにその背中を見つめる。

今ごろハヤテは、まだ学校にいるだろう。そして、主が自分のためにこんなことをしているなんて知らない。

「できたーー！」

…

…

…

…

…マリア味見中

…

…

…

「……」

「あの～、マ、マリア？」

「…つ、作り直しですかね。」

作り上げた時の喜びと興奮が急転直下にローになる。

期待に輝かせていたその目が暗くなり、がっくりと肩を落とした。

「ハァー」

そして、溜め息。

料理って難しい。

そのことを痛感せざる得なかった。

「まあ、でも、見た目は悪いわけではないんですから、練習したら作れるようになりますよ。」

「うん…」

目を伏せたままでナギが答える。出来上がった料理が余程自信があったのだろう、だからこそショックが大きかった。

上手く出来ない自分に自己嫌悪になる。

自分はただ、手料理を食べさせて、あの人の笑顔が見たいだけなのに…

全然……出来ない。

「んっ、んっ、グス…グスっ、」

駄目だ。だんだん悲しくなってきた。

出来ない自分の不概なさが、思い通りにいかないこの状況が、ナギの心を締めつける。

「ほらほら、しっかりして下さい。ハヤテ君に食べて貰いたんでしょっ。」

「……うん。」

泣きそうになっているナギは、だけど、しっかりうなずいた。

まだ、諦めてはいない。

想い浮かぶのは、ハヤテの笑顔。

ハヤテはいつも優しい。いつも自分を助けてくれる。最初に料理をした時だってそうだ。あの時も自分の作った料理を全部食べてくれた。とても食べられたものではないのに。でも、だからこそ、自分の料理を食べて欲しい。今度は本当に、美味しいと言わせたい。

涙を拭い、もう一度挑戦することにした。

自分はまだ諦めてはいけない。大切なあの人に食べて貰って、笑顔になって欲しいから。だから、自分はまだ…する！。

それから三時間、三千院家では何度何度も叫び声が上がることになった。

ハヤテが帰宅したころには、ナギの手はばんそうこだらけで。

心配するハヤテをよそに、ナギは彼を笑顔で迎えた。

大切な人に想いを込めて。

end

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7235e/

ある日の時計塔

2010年10月10日13時27分発行